

Peshawar-kai

ペシャワール会報

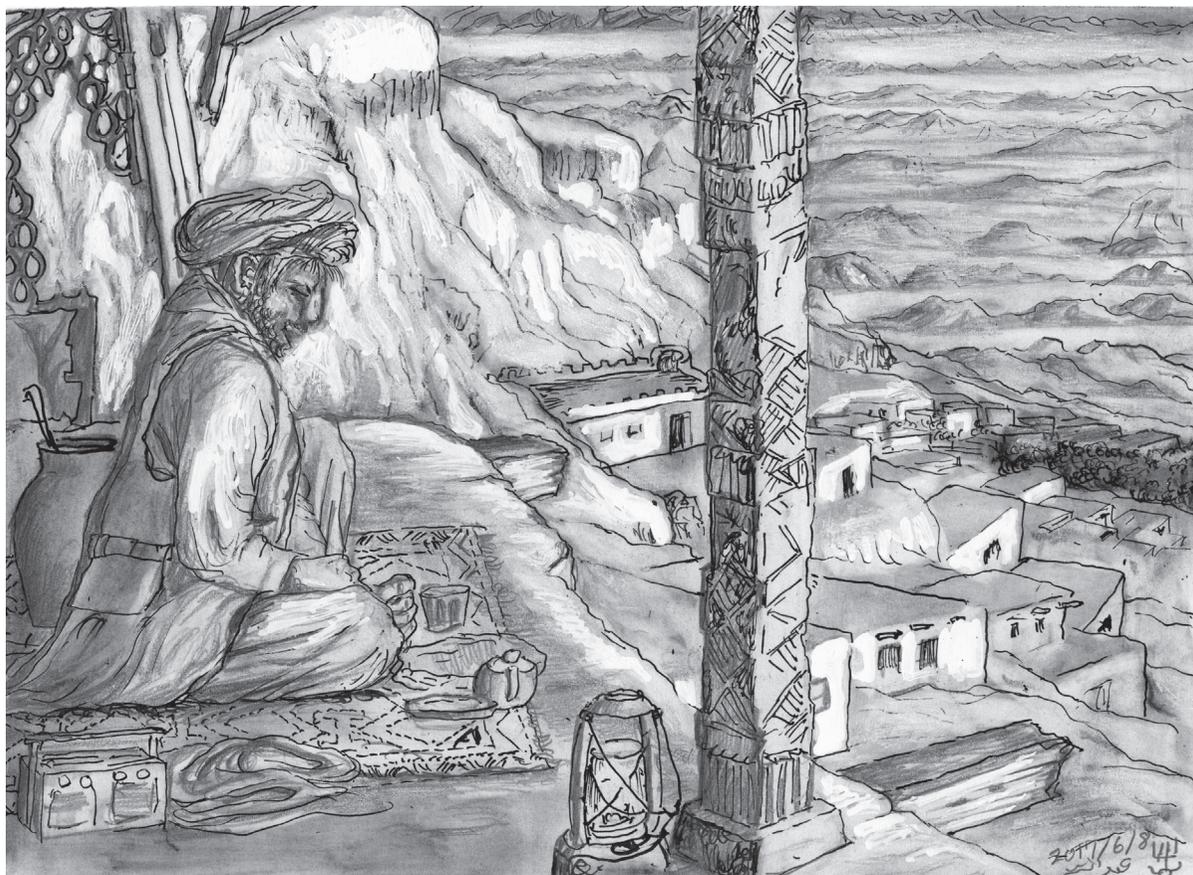
ペシャワール会事務局
〒810-0023 福岡市中央区警固
2-1-17 ハイツみかげ803号
TEL 092 (731) 2372
FAX 092 (731) 2373

No.132

2017年6月28日

〈URL〉 <http://www1a.biglobe.ne.jp/peshawar/>

〈E-mail〉 peshawar@kkh.biglobe.ne.jp



表紙絵 ポプのラマザン／画・甲斐大策

「20年継続体制」に向けて日本側の支援強化を	2016年度現地事業報告	中村 哲
2016年度会計報告		ペシャワール会事務局
お互い顔が見える形の交流の必要性を痛感		村上 優
PMSの事業が現地で受け入れられた理由		ジア・ウル・ラフマン
2000年の井戸掘りから灌漑事業まで		モハマド ファヒーム
灌漑用水はライフライン		ディダール ムシュタク
アフガニスタンにおけるPMS手法の広域展開に向けて—JICA支援の視点から		森口 隼
●カラー特集 PMS副院長ジア医師一行来日、4月21日山田堰視察		

ペシャワール会は、1983年9月、中村哲医師のパキスタンでの医療活動を支援する目的で結成されました。彼の活動を支援するとともに、アジアの人々への理解を深めていきたいと願っています。

「20年継続体制」に向けて日本側の支援強化を

2016年度現地事業報告

アフガニスタンで起きた出来事から今の世界を眺めるとき、世界は末期的状態にさしかかっているようにさえ見えます。無差別の暴力は過去の自分たちの姿です。敵は外にあるわけではありません。私たちの中に潜む欲望や偏見、残虐性が束になるとき、正気を持つ個人が消え、主語のない狂気と臆病が力を振るうことを見てきました。このような状況だからこそ、人と人、人と自然の和解を訴え、私たちの事業も営々と続けられます。ここは祈りを込め、道を探る以外にありません。…そして、この祈りを共有する多くの日本人とアフガン人の手で事業が支えられてきたこと、そのことに救いを見るような気がしています。

PMS総院長／ペシャワール会現地代表 中村 哲

一〇一六年度の概要

異常気象と送還難民

二〇一六年五月から六ヵ月間、アフガニスタン東部は極端な少雨が続き、大干ばつかんばつの再来が危ぶまれた。天水に頼る農地は作付けできなかつた。現在、全アフガンの耕作地かむがのうち灌漑可能な土地は半分に満たず、相当な打撃があったと見られている。二〇一七年一月になって降雨があつたものの、降雪量が少なく、水不足は依然として続くものと思われる。

追い打ちをかけるようにパキスタンからアフガン人難民の強制送還の動きが活発化し、一年間で百万人以上が東部方面に戻つたと報ぜられた。アフガン政府は難民を東部にとどめ置く方針を発表、受け入れ準備を進めた。だが全土で治安が悪化、作業地のあるナンガラハル州でもIS（イスラム国）の動きが活発化した。対する米軍は専ら空爆に頼り、誤爆で各地に被害が出ている。この間隙で犯罪者の動きも激しくなり、警察と軍が監視できるのは点と線になつていく。

送還難民の約七〇%が東部（ラグマン州、ナンガラハル州、クナール州）出身と言われ、大半が農村地帯である。しかし、凶作も重なって難民を吸収する余力なく、



マルワリードⅡ用水路壁の蛇籠工に取り組むヤールモハマッド監督（左）率いる作業員たち（2017年6月1日）

多くの人々がジャララバード市内とその北部に集中した。PMS作業地では各村の爆発的な人口増加が起き、国道沿いは至る所にバザールが林立、想像を超える雑踏が俄かに出現した。難民だけでなく、他地域の不作や治安悪化によって多くの者が逃れてきたからである。

このため、PMS作業地は人口密集地帯となり、交通渋滞で移動にさえ困難をきたす状態である。それでも作業地の治安はさほど荒れておらず、住民とよく一致協力、

仕事は遅滞なく進められた。

PMS年度事業のあらまし

一四年一〇月に始まったミラーン堰（ベスード第二堰）は二回の洪水期を経て、九月に竣工、第四次JICA PMS共同事業（マルワリードII）が、ミラーン堰対岸地域で開始された。これまで蓄積された経験が活かされ、二〇一七年三月までに、予定の工程を完了した。

ガンベリ沙漠方面では、最大の懸案であった主幹排水路の再建が軌道に乗り、一七年三月までに全線一・七kmを開通した。これによりPMSはマルワリード用水路沿いの水紛争に完全に終止符を打ち、ガンベリ地域の灌漑が保障された。湿害の軽度のものを含めると、シギ・シェイワ両村落群で約一〇〇〇畝を超える広大なものである。安定灌漑農地が全村で飛躍的に増加、地域との絆はさらに深まった。〇三年からのマルワリード用水路建設は、これを以て名実に共に完成する。

「緑の大地計画」二十年継続体制

PMSでは、今後二〇二〇年までに予定地域の安定灌漑を実現すると共に、次の展開を見据えて維持体制の確立を図る。このため、一六年三月にガンベリ試験農場の貸与契約を二〇年として、アフガン政府と協

約を結んだ。

次の二〇年間（二〇三六年まで）に新たな展開を予測し、これに備えるためである。見通しがつかない政情の中で、いつでも変化に即応できる体制をとり、水利施設II地域の護りを固める。こうして農村社会に土着化し、維持の上で予期せぬ事態に備え、将来的に「モデル」としての役割を發揮する。広域展開に際して、これが不可欠の基礎だと思われる。

日本ベシャワール会側も既にPMS・Japan（PMS支援室）を設置、この動きに歩調を合わせて強化を図り、長期継続体制を目指すに至った。

1 医療事業

国際救援組織が殆ど撤退する中、地域で重きをなしている。一六年度の診療内容は別表の通り（別表1）。

2 灌漑事業

主な工事は別表2の通り。一六年度は将来の広域展開と、そのための「二〇年継続体制」へ向け、準備段階

に入った。

「緑の大地計画」は、二〇二〇年までに計画地域（安定灌漑面積一六、五〇〇畝、人口六五万人）を完成し、広域展開のためのモデルケースとする予定である。

◎ミラーン堰（ベスード第二堰）

一四年一〇月に着工したミラーン堰は、一六年九月に竣工した。技術的には以下が新局面で、新たな工夫が凝らされた。

- ① 浸食されやすい軟弱地盤での堰造成
- ② 砂州移動と膨大な土砂堆積の対策
- ③ 石出し水制を組み込む護岸方式
- ④ 不安定河道II砂州の固定

今後も観察を続け、改修を重ねて強化していく。特に土砂堆積を避ける「部分可動堰」は、既にカシコート堰で試みられていたが、ミラーン堰でスタイルが決定し、有用性が実証されたと思われる。

別表1 2016年度 診療数及び検査件数

国名	アフガニスタン
地域名	ナンガラハル州
施設名	ダラエヌール診療所
外来患者総数	43,612
【内訳】 一般	32,079
ハンセン病	0
てんかん	573
結核	187
マラリア	6,913
外傷治療総数	3,860
入院患者総数	—
検査総数	12,046
【内訳】 血液一般	752
尿	1,497
便	2,078
ハンセン病塗抹検査	0
抗酸性桿菌	170
マラリア	6,884
リーシュマニア	207
その他	458

ミラーン堰対岸の灌漑計画（マルワリード第Ⅱ堰）

趣 旨

JICAとの共同事業で完成したミラーン堰の対岸（クナル河左岸）には、4ヵ村に約3万人が居住する。同地はナンガラハル州の中でも辺地にあり、援助が行き届きにくい貧困地域である。同地域はクナル河左岸にあり、上流はカシコート地方（2014年・共同事業で取水堰建設）、下流はカマ地方（2012年・取水堰建設）に連続し、上下流約8kmのベルト地帯を成している。かつては耕地850㌔を擁する大きな村落群であった。

しかし、近年頻発する夏の洪水や冬の低水位で取水・灌漑に困難が続き、次第に荒れていった。特に2010年、2013年、2015年と立て続けに起きた記録的な洪水で、耕地の約60%に相当する500㌔を失い、一時は村民の大半が難民化した。

2015年の洪水では、分流が発生してクナル河を二分、下流にあるミラーン堰（当時PMSが建設中）の水量が激減して取水に困難を来たした。取水方法にも問題があり、洪水流入と表土の流失を促し、近年の気候変動による河川の変化（洪水と極端な低水位）に適応できないと思われる。

同地の取水設備を整備して適切な護岸を行えば、難民化した村民の帰農を促し、同地4ヵ村の復興を約束すると共に、対岸（右岸）にあるミラーン堰、シギ村落の安定に大きく寄与することは疑いない。加えて、本事業ではこれまで培ってきた技術・経験が全て活かされ、人員の訓練の場を提供して、次の飛躍を期待できると思われる。

水はアフガン農民にとって生命線である。長引く戦乱に加え、気候変動による農地荒廃は、致命的な打撃を与えてきた。同地の復興によって、PMSが実施してきた「緑の大地計画」が完成に近づき、以て東部アフガンで農村復興の範となることを期待する。

◎**用水路・堰の名称**；マルワリード第Ⅱ堰（村落間抗争を避けるため、特定村落の名を冠せず）

◎**期間（第一期）**；2016年10月から2018年9月（2年間）

◎**場所**；クナル河左岸のカチャラ、コーティ、タラーン、ベラ村落
シェイワ郡・ナンガラハル州・アフガニスタン国（11頁下段地図参照）

◎**工事内容（第一期）**；

- ・取水堰（石張り式斜め堰、堰幅約250m）
- ・取水門（二重堰板方式、取水量2～5 m³/秒）
- ・主幹水路（ソイルセメント・ライニング、水路壁に柳枝工・ふとん籠工、全長4.9kmのうち、第一期・約1.7km）
- ・沈砂池（送水門2、排水門2を備える）
- ・護岸工事（根固め工を伴う連続堤防、全長8.4kmのうち約5 km）
- ・植樹（堤防沿い樹林帯）

◎**裨益人口**；約28,000名（同地域住民）、対岸の安定を入れると更に大きい。

◎**灌漑面積**；約850㌔（既存耕作地を含む）

◎**設計者**；PMS（ピース・ジャパン・メディカル・サービス）

◎**施工者**；PMS（ピース・ジャパン・メディカル・サービス）

◎**推定総工費**；約7億円

◎**全建設後の観察期間**；5年間（2020年～2025年）、PMS現地の責任で実施

別表2 「緑の大地計画」の経過と予定表

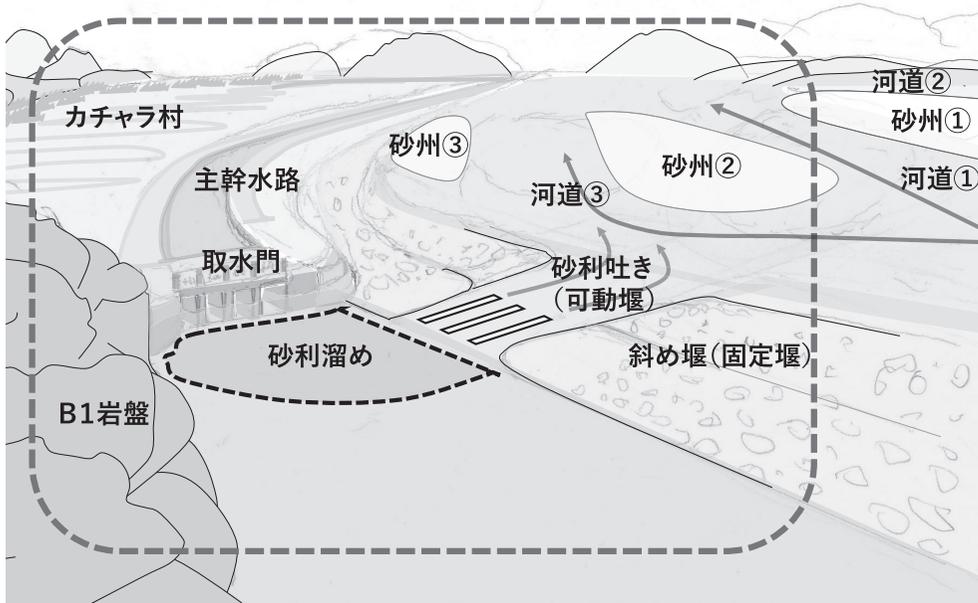
 建設
 維持観察

堰の名称	所在地	'03~'10	'11	'12	'13	'14	'15	'16	'17	'18	'19	'20
マルワリードⅠ	シェイワ郡・ジャリババ					沈砂池改修		取水門改修				
シェイワ堰	シェイワ郡・カンレイ村											
カマ第Ⅰ堰	カマ郡・上流域								改修			
カマ第Ⅱ堰	カマ郡・中流域								改修			
バスード第Ⅰ堰	バスード郡・カシマバード											
タブー堰	バスード郡・タブー地域								廃止、ミラーン堰へ統合			
カシコート連続堰	シェイワ郡・カシコート											
バスード第Ⅱ堰	バスード郡・ミラーン											
新シギ堰	シェイワ郡・シギ地域											
マルワリードⅡ	シェイワ郡・カチャラ村											
バルカシコート堰	シェイワ郡・バルカシコート									延期		
シギ延長路												
クズカシコート主水路												
ガンバリ給排水路												
ガンバリ農場												
訓練所(他地域展開への準備)												

なお本堰はバスード郡クナル河沿いの一、一〇〇畝を潤すが、安定した本堰にタブー流域五〇〇畝を統合した。タブー堰を廃止し、現在ミラーン堰の灌漑面積は一、六〇〇畝である。

◎マルワリードⅡの着工
ミラーン堰対岸は、4カ村に三万人が居住する。一五年夏の出水で同堰対岸上流に分流が発生、堰を通過する水量が激減してミラーン側が取水困難に陥ると共に、対岸村落(コーテイ、タラーン、ベラ)では耕地の半分が冠水または流失した。対岸の村民は一斉にパキスタンへ難民化した。PMSが新河道の閉塞と約二・五kmの護岸を行って洪水被害の進行を食い止めた。

ミラーン堰維持のためにも同地域の安定は欠かせない。一六年二月、対岸自治会とPMSとの間で協約が成り調査を開始、州行政やJICAが協力、一六年一〇月から四年間をかける対



マルワリードⅡ堰と取水門の鳥瞰図

岸地域の復興計画(マルワリードⅡ)が計画された(詳細は4頁)。
二〇一六年一〇月に第二期二カ年の工事

が最上流のカチャラ村で始まった。一七年三月までに堰の仮工事を終了、沈砂池まで約1kmの主幹水路に送水を開始した。これによって、最上流のカチャラ村の灌漑農地が倍増し、帰還難民の爆発的增加に悩む同村に大きな安堵を与えた。また、洪水対策で護岸の緊急仮工事が急ピッチで進められ、一七年六月現在、護岸線は予定八・五kmのうち、六km地点を工事中である（うち約二・五kmはミラーン堰工事の一環で行われた分流のしめきり堤）。

技術的にはこれまでの経験が大いに活かされ、「部分可動堰」+固定堰（湾曲斜め堰）のスタイルが確立、完成度が最も高いものとなっている。土砂堆積がミラーン堰と同様、大きな課題であったが、本堰の建設によって決着が期待されている。

また、現場と事務所が一体となって工事の手順に慣れ、異例の速さで建設が進められたことも、特筆すべきである。

折よく難民の帰郷時期に重なったことは、地域にとって大きな意味を持った。臨時ではあるが、村々は数百名の雇用を得て農地拡大に寄与し、難民の帰農が促された。

◎シエイワ郡全域の湿地処理＝マルワリード用水路の実質的な完成

一年四ヵ月にわたる主幹排水路工事約一・七kmが間もなく完了する（詳細は一五年度報告―会報一二八号を参照）。

マルワリード用水路建設に伴う湿地処理は、長い間の懸案であった。二〇一五年までに大小約六〇kmを超える排水路網で湿地が処理されてはいたが、排水力が限界に達してガンベリ沙漠開拓が危ぶまれていた。主幹排水路の通過するシギ上流域全体が低地で、沙漠開拓に伴う湿地化が懸念されていたからだ。遅くとも一七年八月までに同工事が終了するのは確実である。

ここでも帰郷難民があふれ、PMSは可能な限り人海戦術を採用、数百名の作業員の雇用を確保した。

排水路の恩恵はシエイワ郡約二、〇〇〇戸に及び、これによって「マルワリード用水路建設」が名実共に完成、ガンベリ沙漠開拓を保証した。

◎他地域展開への準備

PMSは以後の工事を「他地域展開への準備」と位置づけ、FAO（国連食糧農業機関）とも協力、以下が一六年度に行われた。

- ① 訓練所の建設
- ② 実習教材の準備

訓練所はミラーン堰の空き地に建設され、PMSの各取水設備にアプローチしやすく、今後の維持の上で利便性が高い（11頁下段地図）。訓練所は宿泊施設に簡単な教室を併設したもので、現場で働きながら学ぶ者を対象とする。一般的な河川工学や



ミラーン堰近くに建設中の訓練所（2017年4月26日）

灌漑技術の知識を教えるのではなく、PMSの取水設備を実際に体得することを主な目的としている。各村の農民、地主、水主らが対象で、読み書きの能力を問わない。

一七年三月までに基礎と一階部分が成り、現在二階部分を建設中である。約六〇名が宿泊可能である。

日本側では、山田堰土地改良区とペシャワール会（福岡）が協力し、山田堰の模型やビデオなど、訓練のための教材作成が進められた。

基本方針の要約は以下の通り。
一、文化や地勢・気候の類似した東部アフ

ガンを中心に、徐々に且つ確実に拡大。
二、実事業を継続しながら、その中で「土着の実戦部隊」を組織的に育成。

三、中央集権的な方法でなく、地域中心、かつ住民の自主性を尊重。

現下の不穏情勢を考慮し、「緑の大地計画」が区切りを迎える二〇二〇年頃までには体制を整える予定である。

◎カシコート方面の工事を延期、

カマ第一・第二堰の改修

「マルワリードII」と排水路工事の見通しが立つ段階で、カシコート方面の工事が計画されていたが、難民の急増と治安の悪化で動きがつかなかった。広域で複数にまたがる作業地は管理困難と判断、当面の計画を延期した。

代ってマルワリードIIの下流に隣接するカマ堰の最終的な改修を計画している。カマ堰は「緑の大地計画」の中で耕地面積が最大で、I・II堰併せて約七、〇〇〇畝、全体の約半分を占める。年々の小改修で安定しているが、砂州移動の及ぼす影響が問題になっている。かつ帰還難民の最大の吸収地である。万一の混乱に備えて部分可動堰を設置、安定給水を更に確実なものにする。一六年度は測量を繰り返し、一七年度に施工すべく計画された。

※部分可動堰+湾曲斜め堰について

日本では可動堰を河道全体に設置し、倒

伏式のゲートで油圧電動式、コンピュータ制御である。冬の低水位期に水位を上げて取水を安定させる便がある。現地では建設が不可能なので、堰板手動式で増水期前にゲートを開放する。また、コンクリートの特性を活かし、深い急流を作れば土砂対策に極めて有効。PMSでは、岩盤を背にした取水堰で土砂吐きと兼用で斜め堰(固定堰)と組み合わせる方式が定着した。堰

造成に際して架橋し、交通路を確保でき、工期を著しく短縮することができる。カシコート堰で試され、ミラーン堰で実用化された。

湾曲斜め堰は、一昔前まで日本でも行われた固定堰の工法である。斜め堰上流側を湾曲させて越流する水を河道中央に集め、対岸への影響を防ぐ。

3 農業・ガンベリ沙漠開拓

◎PMSガンベリ農場

ガンベリ沙漠では、二〇〇九年、用水路の開通と同時にガンベリ農場を拓き、PMSの自給体制を整え、用水路維持に役立てようとした。これが「自立定着村」構想である。その後農地法の改正で居住区ができなくなり、ベスード郡の一角に移した。

一六年二月、アフガン政府と協約、開墾地二三五畝を農地として半永久的に借用する契約が成った。契約は二〇年毎に更新さ

れ、PMSの解散がない限り、継続される。排水路問題が解決した現在、急速に開墾が進むことが予想される。

◎オレンジの出荷

一六年度の最大の成果は、柑橘類の結果が観察され始めたことで、移植したオレンジ約一二、〇〇〇本のうち数パーセントで結果を確認した。出荷に向けて期待が高まっている。小麦は約六〇畝で作付けが行われ、ヘクタールあたり約二トン、米はヘクタールあたり二・三トンの収穫を得ている。ザクロは品質が今一つで、苗木の植え替えまたは柑橘類への変更を検討している。畜



ガンベリ農場で刈り取った小麦の脱穀作業 (2017年5月18日)

別表3 植樹総数(2003年3月から2017年3月まで)

種類	場所	2003~07年	2008年	2009年	2010年	2011年	2012年	2013年	2014年	2015年	2016年	2017年(1~3月)	合計
ヤナギ	用水路の兩岸、河川工事	116,050	55,380	97,380	60,750	73,315	23,650	37,073	18,400	39,650	14,700	3,900	540,248
クワ	用水路土手	7,000	2,750	8,578	4,430	140	292	0	0	0	0	0	23,190
オリーブ	用水路土手、オリーブ園	2,000	0	840	0	0	0	1,424	1,275	240	136	0	5,915
ユーカリ	砂防林、護岸樹林帯	2,500	1,000	11,478	39,584	22,350	28,196	7,150	7,500	2,611	500	3,659	126,528
ピエラ	ガンバリ沙漠	0	300	600	1,165	165	2,083	175	75	0	0	0	4,563
紅柳	砂防林	0	15,100	71,300	14,356	9,887	22,317	3,573	780	265	0	0	137,578
シーシャム	護岸樹林帯	0	0	0	0	0	0	4,614	1,400	2,000	6,270	0	14,284
ポプラ	ガンバリ沙漠	0	0	0	4,900	10,786	1,850	0	220	0	0	0	17,756
イトスギ	モスク、学校、公園	0	0	0	60	195	300	0	0	0	110	0	665
果樹	ガンバリ果樹園	600	0	0	193	0	6,034	5,283	9,185	1,458	1,822	4,348	28,923
その他		0	0	0	132	190	412	144	50	26	0	1,073	2,027
		128,150	74,530	190,176	125,570	117,028	85,134	59,436	38,885	46,250	23,538	12,980	901,677

産関係で進展が見られ乳牛一頭、子牛二頭となり、わずかではあるが生乳からの収入が毎月発生している。

日本大使館が協力したナツメヤシ園の造成は、早生種の苗を移植、一七年三月に完了した。

◎植樹

一六年一月～二月の植樹数は二三、五三八本、大半が新設用水路沿いの柳枝工と護岸工事に伴う樹林帯造成で占められる。一七年三月までの総植樹数は九〇一、六七七本である(別表3)。

4 ワーカー派遣・その他

◎支援室の強化と二十年継続体制

現場に中村一名が常駐した。事務量が膨大となり、ベシャワール会事務局内に「PMS支援室」が設置されたが追いつかず、更に専従の増員強化が計画されている。

支援室は事実上ジャラバード事務所と一体化し、円滑な業務を遂行する。

今後「二〇年体制」の日本側の要として機能すべく、基金団体であるベシャワール会と、現地事業体であるPMSとの役割分担が明確にされた。

また、実情を知る上で現地との交流を活発にすることの必要性が痛感され、一七年四月、シア副院長一行の歓迎会が催された。長期継続のためには、今後も交流の機

会を増やすこと、将来に備えて基金を蓄積することが、ベシャワール会とPMSの間で確認された。

二〇一七年度計画

二〇一六年度の連続である。

河川・灌漑関係では、対岸コーティ、タラン、ベラ、カチャラの4カ村の復興に力を注ぐ(「マルワリードII」)。約八五〇畝のうちカチャラ村二〇〇畝の安定灌漑、全既存耕地の送水路確保、洪水対策を計画している(11頁上段地図)。

カマ堰改修は一七年一〇月に準備を開始、同年一月から一八年二月までの4カ月間で一気に部分可動堰設置を進める。

訓練所の建設はFAOと協力して一七年十月までに竣工予定。教材も同時期にそろえ、訓練計画の日程が作成される。しかし、泥沼の治安情勢の中で小さくない仕事を抱え、計画通りに進めるのは困難であるため、柔軟に対処する予定である。

最大のものは「二〇年継続体制」の準備である。PMSジャラバード事務所の改組、日本側PMS・Japan(PMS支援室)の拡充を実行し、長期に備える。

なお、カシコト方面は当分大きな工事は無理と判断され、情勢の安定する時機まで待機する。全体に現下の情勢は予断を許さず、短期的に計画の変更や延期があり得

二〇一六年度を振り返って

るので、事態を注視して頂きたい。

ゆく者は斯く^かの如しか。昼夜をおかず。ペシャワール赴任から三三年が経ちました。歳をとったせい^かか、川の流れを見ながら、この間の出来事を夢のように思い返すことが多くなってきました。多くの友人や仲間、先輩たちも他界し、ここまで生き延びて事業が続いていることを奇跡のように感じています。

最近アフガニスタンの報道が絶え、偶^{たま}に日本に伝わるのは爆破事件、テロ、誤爆や難民など、恐ろしいことや悲しいことばかりです。いつの間にか「テロ」という言葉が人々の頭脳に定着し、対テロと言えども何でも正当化できるような錯覚が流布しています。しかし、今世界が脅えるテロの恐怖は、一六年前の二〇〇一年、「アフガン報復爆撃」に始まりました。

あの時が分岐点でした。飢餓に苦しむ瀕死の小国に対し、世界中の強国が集まってどどめを刺しました。無論、罪のない大勢のアフガン人が死にました。そして「二次被害」の一言で、おびただしい犠牲は「仕方ない」とされました。まるで魔女狩りのようにテロリスト狩りが横行し、どんな残酷な仕打ちも黙認されました。平和を求め声も冷たい視線を浴び、武力が現実的解

決であるかのような論調が横行しました。文明は倫理的な歯止めを失い、弱い立場の者を大勢で虐待することが世界中で流行り始めたのです。別の道は本当になかったのでしょうか。

他方、干ばつと飢餓はやまず、多くの人々が依然として飢餓と貧困にあえいでいます。アフガニスタンで起きた出来事から今の世界を眺めるとき、世界は末期的状態にさしかかっているようにさえ見えます。無差別の暴力は過去の自分たちの姿です。敵は外にあるのではありません。私たちの中に潜む欲望や偏見、残虐性が束になるとき、正気を持つ個人が消え、主語のない狂気と臆病が力を振るうことを見してきました。

このような状況だからこそ、人と人、人と自然の和解を訴え、私たちの事業も営々と続けられます。ここは祈りを込め、道を探る以外にありません。祈りがその通りに実現するとは限りませんが、それで正気と人間らしさを保つことはできます。

そして、この祈りを共有する多くの日本人とアフガン人の手で事業が支えられてきたこと、そのことに救いを見るような気がしています。

今また二〇年継続体制を打ち出し、事業を次の代に引き継ぐ時がやってきました。この良心の絆を絶やさず、最後の体当たりつもりで臨みたいと考えています。これ

までの温かいご関心に感謝し、ご協力を切にお願い申し上げます。



中村 哲^{なかつむ}：九州大 医学部卒。専門は神経内科（現地では内科・外科もこなす）。国内の病院勤務を経て、

一九八四年パキスタン・カイバル・パクトゥンクワ州（旧北西辺境州）の州都ペシャワールに赴任。ハンセン病コントロール計画を柱にした、貧困層の診療に携る。八六年からはアフガン難民のための事業を設立し、アフガン北東山岳部に三つの診療所を開設。九八年には基地病院PMSをペシャワールに建設。また病院・診療所で患者を待つだけでなく、パキスタン北部山岳地帯の診療所を拠点に巡回診療も開始。二〇〇〇年以降は、アフガニスタンを襲った大干ばつ対策のための水源確保（井戸掘り・カレーズの復旧。作業地千六百ヶ所以上）事業を実践。さらに〇二年春からアフガン東部山村での長期的復興計画「緑の大地計画」を開始。〇三年三月からは灌漑水利計画に着手し、一〇年三月全長約二五キロが開通。ダラエヌール診療所の年間診療数約四三、六〇〇人（二〇一六年度）。

2016年度の主な収支

期間 2016年4月～2017年3月

16年度会計報告

一般会計(単位:円)

[収入の部]	
1 会費・寄付	361,619,943 ①
2 補助金等	0
3 利息雑収入	199,129 ②
4 収益事業収入	1,500,670 ③
5 基金取崩	0
年度収入計	363,319,742
前年度繰越	62,937,079
収入計	426,256,821

[支出の部]

1 現地協力費	81,106,958
うちPMS運営協力費	11,398,825
アフガン事業費	61,168,354 ④
ワーカー費	1,007,472 ⑤
渡航費	2,820,956
国内活動費	4,711,351
2 広報費	12,581,517 ⑥
3 事務局費	11,318,254
年度支出計	105,006,729
基金への繰入	260,000,000
次年度繰越	61,250,092
支出計	426,256,821

- ① 会費寄付(個人16,849件/団体603件)
- ② 利息、為替差益
- ③ (収益事業会計から)
- ④ 農業用灌漑用水路建設等
- ⑤ 現地支援ワーカー等
- ⑥ 会報印刷送料等
- ⑦ カレンダー印刷、写真使用料、取材謝礼

収益事業会計

[収入の部]	
書籍売上	2,214,421
DVD売上	4,871,093
雑収入	881,760 ⑦
売上収入計	7,967,274
[経費の部]	
書籍等原価	5,639,548
販売費	372,556
事業所税等	454,500
経費合計	6,466,604
収益事業収入	1,500,670

「いのちの基金」残高

期首残高	530,000,000
一般会計から繰入	260,000,000
期末残高	790,000,000

●2016年度事業額(支出ベース)
105,006,729円

監査報告書

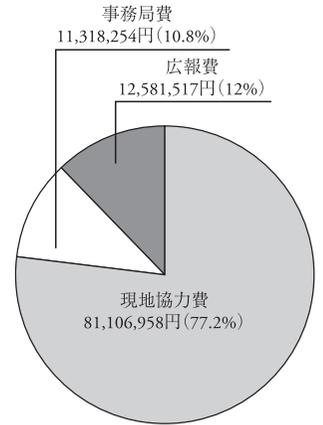
2016年度ベシャワール会会計については適正に会計処理がなされているものと認めます。

2017年5月29日 ベシャワール会 監事
美奈川 氏

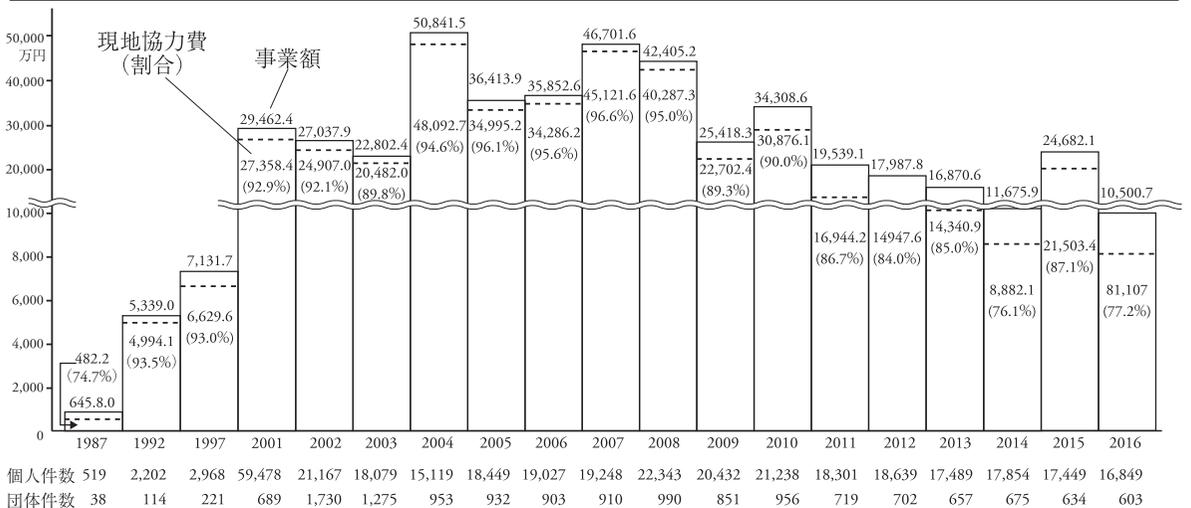
未使用切手、書き損じ葉書の寄付

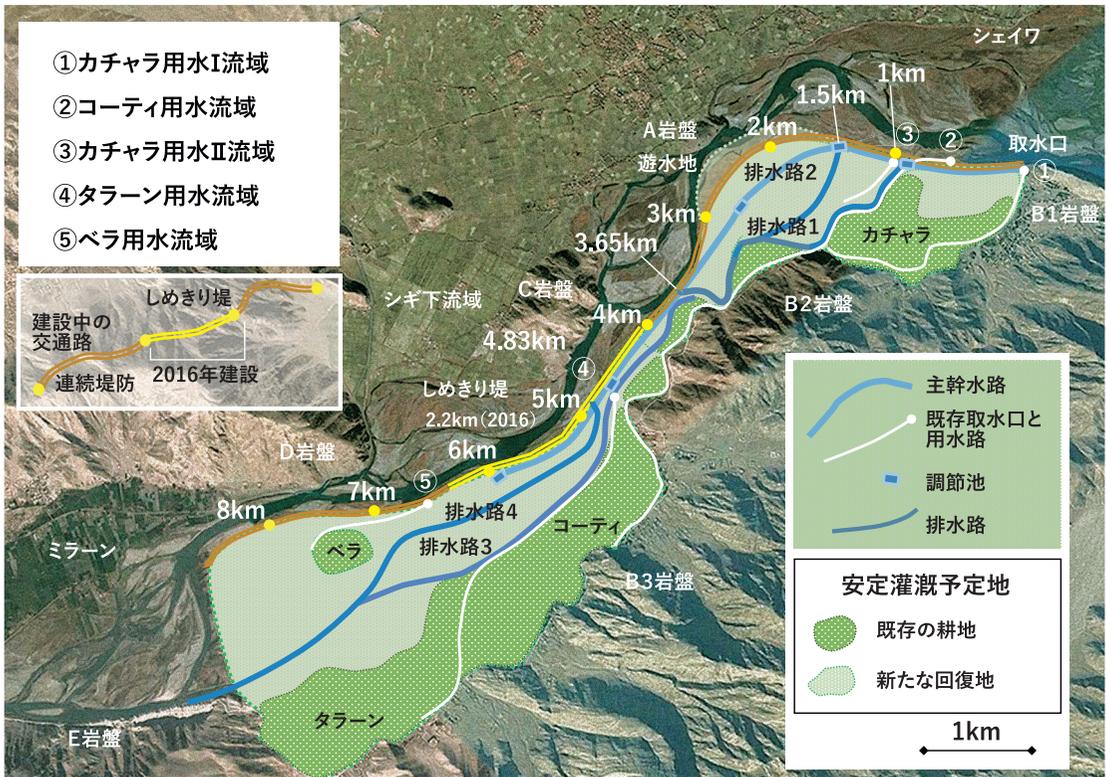
寄付いただいた件数	859件
未使用切手枚数	68,850枚
同 金額	3,224,983円相当
書き損じ葉書枚数	22,431枚
同 金額	1,060,228円相当
合計金額	4,285,211円相当

*会報発送費用に活用しています。



事業規模(会費・寄付件数、事業額)の推移 1987～2016(年度)





建設中の交通路・連続堤防及び用水路・排水路予定ルート



PMSの水利事業で安定灌漑される予定地域 2020年



マルワリードⅡ用水路200m地点の植樹作業。1㎡あたりに約10本、シルトと砂質の混合土に挿し、ポンプを使わずバケツでひたすら水をやる。活着率95%以上（2017年6月12日）



マルワリードⅡ沈砂池の現在。池からのコーティ分水路は1ヵ月後には送水が可能となる。分水路に沿って流れる排水路1は下流のタラーン村を潤す（2017年6月12日）

【カラー特集】
PMS 副院長・ジア医師一行来日、4月21日山田堰視察



山田堰土地改良区理事長徳永氏の説明を受けながら——ホテル屋上より筑後川流域を望む



懇親会にて3職員を歓迎する中村医師（2017年4月21日）



山田堰構造物でのJICAの森口氏とファヒーム技師



山田堰視察を前にして中村医師より講義



山田堰にて歓談する中村医師とジア医師



ペンを取り、山田堰の構造物に関する説明をする中村医師

お互い顔が見える形の 交流の必要性を痛感

ペシャワール会会長

村上優

ジア医師、十一年ぶりの来日

今年の四月一五日より二二日までの間、PMS副院長のジア先生、技術者のディダール氏とファヒーム氏がJICAとの共同事業の意見交換を目的に招聘されて訪日されました。ジア先生の前回訪日は二〇〇六年でしたので、十一年ぶりの二度目になります。

日程の前半は中村先生も交えて東京でJICA（国際協力機構）との協議、後半の四月一九日から二二日は福岡のペシャワール会事務局を訪問されて交流し、マルワリード用水路をはじめPMSが手掛けている取水口の手本である福岡県朝倉市の山田堰を見学されました。山田堰土地改良区理事長の徳永さんの説明を熱心に聞きながら、和らいだ表情で身を乗り出して質問をしておられるのが印象的でした。

二二日には連日の過密日程にもかかわらず、事務局メンバー、会員、さらには多く

の元現地ワーカーが出迎えるなか、ペシャワール会主催の歓迎の宴に参加をしていただきました。挨拶に立たれたジア先生より日本側の支援に対する感謝と、これからの活動についての力強い意志をうかがいました。

良きパートナー

ペシャワール会事務局がジア先生と出会ったのはPMS基地病院がスタートした一九九八年です（中村先生や藤田さんはそれ以前からです）。以来PMS病院がかの地で様々に変遷する活動を支え、最も中村先生を理解するパートナーとして幾多の困難をともにされているのを目にしてきました。激動の現地にあつて医療から水利事業、農業事業へ目まぐるしく展開し、医師の役割からPeace Japan Medical Servicesと改称したPMSがアフガニスタンの国際NGOの認可を受ける中で、PMS全体の活動の中心となりました。多くの日本人ワーカーやアフガン人メンバーが行き交う中で変わらぬ存在でした。

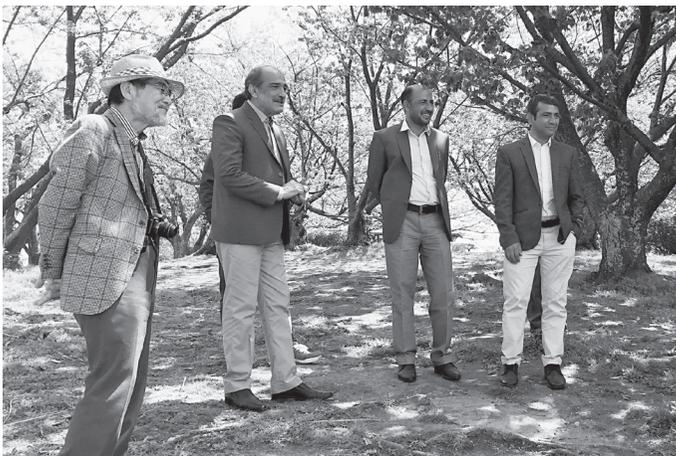
来日して久しぶりに出会った日本人ワーカーOBをよく覚えておられたのが、その誠実な人柄を表しています。一緒に来日したディダール氏とファヒーム氏も下積み時代のエンジニア時代からの付き合い合いです。現地も日本も多くのの人々に支えられての事業で

あることを再確認させられます。

次世代の協力関係

中村先生は今後二〇年間はPMS事業が継続し、充分アフガニスタンに根付くまでの在り方を提案されています。現在ではJICA共同事業や日本大使館の草の根無償援助、国連食糧農業機関（FAO）などペシャワール会以外からも、事業への評価と支援を得ることができるようになりました。

この時期、ジア先生の存在の重要性はき



PMS職員達と談笑する村上優会長

らに増しています。加えて日本側も多くの財政上の支援を持続させるための方策が必要です。今まで通り理解を得てご支援をいただきながら、次世代の日本とアフガニスタンの協力関係を力強く継続することの大切さを今回のジア先生一行の来日で改めて感じました。前回の来日からあまりにも長い時間がたちました。これからは中村先生だけに頼らず、お互い顔が見える形での交流を図り、相互に向向いて信頼や相互理解を深める必要性を痛感しました。

来日の最終日、日本の思い出にと、事務局有志と一緒に博多湾に浮かぶ能古島のこのしまに船で渡り、アフガニスタンでは見られない海

を楽しんできました。島の公園には花が咲き誇り、春風とともに、ゆったりとした時間を過ごすことができて和みました。この時にアフガニスタンより九州大学工学部に留学していた青年と偶然出会い、しばらくジア先生一行と歓談していました。彼は広島で行われた中村先生のJICA主催講演会に出てPMS事業のことを理解していました。ジア先生もこんな出会いは想定していなかったことでしょう。いろいろな偶然の出会いがいつしか必然となり、これからのPMS事業の発展が実態あるものになるのではと感じた瞬間でした。

なメッセージをおくりました。▲

PMSの事業が 現地で受け入れられた理由わけ

PMS副院長

ジア・ウル・ラフマン

▼四月一五日から二二日まで、PMS副院長ジア医師とディジタル技師、ファヒーム技師の三人が、JICA（日本国際協力機構）の招きで来日しました。四月二〇日、福岡の事務局にてジア医師と両技師が会員の皆様及び、事務局に対して、以下のような

故郷に帰ってきた思い

今日は本当にありがとうございます。

故郷に帰ってきた、そのような気がしています。一九九六年にドクター・サーブ中村と一緒に仕事をし始め、もう二〇年が経ちますけれども、今ここで私が感じるのは、故郷に戻ってきてわが家できつろいでいるという気分です。皆様のこれまでの協力に心から感謝申し上げます。

皆様はご存知の事と思いますが、ペシャワール会は一九八三年に設立されました。

それはドクター・サーブ中村の、貧しい人々を助けていこうというお考えの下でスタートしました。私共は一九八四年に中村先生がドクターとして現地に来ていただいたこと、ペシャワールに来ていただいたことを非常に幸運であつたと考えています。それ以来中村先生はアフガン人患者のために尽くして下さっておりますけれども、アフガン人として私は先生に、そして皆様から感謝しております。

PMS（平和医療団・日本）はペシャワール会にはハンセン病の診療から始まりましたが、ハンセン病には偏見があり、だれも患者を受け入れようとしませんでした。そんな中、中村先生は、医者にとつて患者に変わりはない、アフガン人であろうとパキスタン人であろうと、日本人であろうとアメリカ人であろうと関係ないと言われ、現地に組織を作り、貧しい人々を救うためにペシャワール会医療サービス（PMS・現ピース・ジャパン・メディカルサービス）の病院を建てていただきました。

ハンセン病と診療所

一九八九年には、中村先生がアフガニスタン国内に診療所を建設することを決意されました。アフガニスタンのガラエヌールに診療所を建てたのですが、ガラエヌールに加え、ガラエピーチとガラエワマにも診

療所を建設することを決意されました。アフガニスタンの社会というのは殆どが農村地域であり、更に山岳地の田舎には貧しい人々が住んでいます。そのような地域にハンセン病の患者さんが多いわけですが、ハンセン病になっていられると偏見により村から追放されることもありまして。

中村先生はこれを社会問題としてとらえ、どのように治療したらよいのかを考え、私達は診療チームを結成して患者さんを定期的に検診し、治療する活動を開始致しました。これをアフガニスタンの人々は見ていたのです。ドクター・サブ中村がハンセン病の患者を治療し、そして診療チームのスタッフは患者さんと一緒に食事を摂っている。このような態度はアフガニスタンの社会の人々の考え方にも影響を及ぼしてきたのです。

パキスタンにおいては移動診療所を作り、僻地に赴き、患者の治療に当たり、同じように定期検診を行いました。ペシャワール会の支援により一九九八年に大変美しいPMS（ペシャワール会医療サービス）病院も建設しました。自分たちの車両、自分たちのスタッフを持てる病院となり、ここで原則無料の診察、無料の治療を行い、一般診療の患者さんの病気を完全に治してから家に帰すようにしていました。

つまりペシャワール会の病院は患者さんの生活の全体をケアしていたのです。治療を必要としている患者さんに対してこのようなケアを提供するということでPMSは素晴らしい活動をしたと誇りに思います。

干ばつの顕在化

アフガン国内の三つのクリニックにおい

【技術と魂の記録】



アフガン・緑の大地計画

—— 伝統に学ぶ灌漑工法と甦る農業

中村 哲

安定灌漑は、偉大な「投資」である——

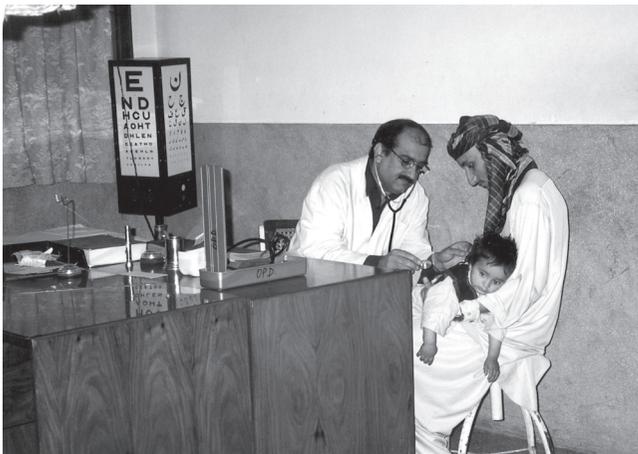
戦乱の続くなか、干ばつと洪水で荒廃に瀕した農地と沙漠。この過酷な自然に、日本の伝統的な工法から学びつつ挑んだ十五年の技術と魂の記録

A5判全カラー1229頁 〔新刊〕本体2300円＋税

*事務局でも取り扱っています

石風社

〒810-0004 福岡市中央区渡辺通2-3-24
ダイレイ第5ビル5階 電話092(714)4838
www.sekifusha.com FAX092(725)3440



ペシャワールのPMS基地病院で診療中のジア副院長（2000年代前半）

て診療をしていた二〇〇〇年、診療所の周辺の人口は減っているにも拘らず、消化管の病が増えていて、ということ、ドクター中村やシスター藤田のところへ様々なレポートが入るようになりました。

何故人口は減るのに胃腸病が増えているのか、何故非常に珍しい症例が増えているのだろうか。その後分かったのは水に問題があるということでした。飲料水が枯渇して汚染された水を飲んでいたので。

当時、動物も人間も同じ水源から水を飲み、飲料水に適さない水を飲んでいま

た。ロダット、アチンなどの水の無い地区から人々が押し寄せ、人と動物が同じ水源から水を飲む、こういった問題に対して解決法はないか思索しておりました。当時は様々なグループが支援活動をしておりましたが、時間の流れと共にそういった人々は現地を去り、お金と逃げ場のない住民だけが残されるということになりました。

中村先生も覚えておられるでしょうけれども、世界保健機関(WHO)が、もうここで助からないのであれば、どこか他所の地域に人々を移すしかないと報告した時期もありました。

そのとき中村先生が「少し時間をくれ、待っていてくれ、日本に戻ってベシャワール会と相談してくるから」とおっしゃいました。

そして戻って来られて、私たちはチャンスを頂き、調査をし、井戸掘削事業を展開することができました。そのことに関して、ここでベシャワール会の皆様に心から感謝を申し上げたいと思います。私たちは一、六〇〇本を超える井戸をソルフロッド、ロダッド、アチン、カマ、シェイワ、ダラエヌールに掘り、国境のトルハムにも歴史的な井戸を掘削することが出来ました。

JICA・大使館との共同事業

JICAとの共同プロジェクトが行われ

ている地域は、現在アフガンの人々でも行かないような場所です。しかし中村先生は朝には出かけて、午後には無事に戻ってこられます。二〇一〇年にJICAとの共同プロジェクトとして始動したカマIIの建設プロジェクトの完成により五、〇〇〇畝の土地が灌漑され、それ以外にもベスードの護岸が既に完了し、五〇〇〇畝の土地が灌漑されています。

同様にカシマバード(ベスードI)のプロジェクトでも二、五〇〇畝の土地が灌漑されています。JICAとの共同プロジェクトはカマ、カシマバード、カシコートという地域をカバーしています。

三つ目のプロジェクトがミラーンにおける取水口の建設になります。1kmにわたる護岸工事を行いました。これは非常に美しいプロジェクトで、恩恵を受けている人々が現地には沢山おり、灌漑面積は一、六〇〇畝に及びます。

現在の共同プロジェクトであるマルワリードIIは、二〇一六年一〇月に開始し二〇一八年の九月に完成する計画で、私たちは大変忙しく仕事をしております。これが完成すれば八・五kmに及ぶ護岸もでき、洪水から村や畑が守られるということで、灌漑される土地の面積は八五〇畝となります。

これ以外にも日本大使館とのプロジェクトとしてナツメヤシの植樹も行っています。

す。これについては政府の正式な手紙が来て、このナツメヤシの果樹園を「ガンベリガーデン」と呼ぼうという通達が来たほどです。そのようなことが実現できたのも、二〇年余に及びベシャワール会の支援によりPMSが現地で住民のより良い生活のために活動を続けてきたからなのです。

これらのプロジェクトに加え、PMSガンベリ農場では畜産も行われています。

また美しい公園も作られ、この公園にはカブルから人々がピクニックに来るようになっております。

1987年のメモロ

活動地の水路の橋の所には水が有効に使われないままに垂れ流されているところがありました。ここにサイフォンを作ればいいではないかと中村先生がおっしゃり、その先の取水が十分にできずに困っている人々のために全長六〇〇mのサイフォンを作りました。これもベシャワール会の皆様の援助と中村先生の指揮の下で実現できたことであると考えています。

アフガニスタンのことわざでは、「一人の人間の一つの手のひらには一つのメロンしか載せることはできない、二つのメロンは持てない」といわれます。しかし中村先生は二つどころか、三つのメロンを手に載せているのです。つまり中村先生は医師で

医者、用水路を拓く

アフガンの大地から世界の虚構に挑む
中村哲 [6刷] 1800円
 辺境で診る辺境が見る [5刷] 1800円
 医者 井戸を掘る [12刷] 1800円
 医は国境を越えて [7刷] 2000円
 ダラエ・ヌールへの道 [5刷] 2000円
 ペシャワールにて [8刷] 1800円

アフガン農業支援奮闘記

高橋修・編著 2500円

聖愚者の物語

甲斐大策 1800円

石風社 福岡市中央区渡辺通2-3-24
電話092(714)4838

人は愛するに足り、真心は

信ずるに足る アフガンとの約束

中村哲／澤地久枝(聞き手) 2000円
 東京都千代田区一ツ橋2-5-5
 岩波書店 電話03(5210)4000

天、共に在り

アフガニスタン
三十年の闘い

中村哲 1600円
 NHK出版 東京都渋谷区宇田川町41-1
 電話03(3464)7311

価格はすべて本体価格(税別)です

アフガニスタン DVD

用水路が運ぶ
恵みと平和

朗読 吉永小百合
3000円(税+送料込)



あり、技師であり、そして農業のスペシャリストであるということ、三つのメロンを一つの手に載せているということです。私はアフガン人として、そしてナンガラハル州の人間として中村先生の長寿を心からお祈りし、非常な困難に満ちているアフガンの状況を素晴らしい、美しい場所に変えてくださいましたことに感謝を申し上げます。

三つの質問

PM Sについて、三つのことを自問自答してみます。

一つ目。何故PM Sの活動は成功するか。

二つ目。住民は何故PM Sの活動が良いと思うのか。

三つ目。中村先生は外国人であるにも拘

らず、何故問題なく現地でも活動できるのか。私は、次のように考えています。

何故人々がPM Sの活動を素晴らしいと感じるのか。それは、PM Sがどのような仕事をしているのか、当地で何をしているのか、教育を受けていない現地の人々にも明確に見て分かるからです。多くの外国の組織が幾つものプロジェクトを行いました。北欧のプロジェクトがありました。カシマバードでは中欧の関係者が出資していたプロジェクトがありました。しかし、いずれも失敗してあります。そのような例は、枚挙にいとまがありません。

二年前にFAO(国連食糧農業機関)の外国人が来て、PM Sのプロジェクトとヨーロッパの団体により行われたタンギトウクターのプロジェクトを比較していったこ

とがありました。何故PM Sの活動が現地の人々に認められているのか、それはPM Sのプロジェクトが地域住民に実質的な恩恵を与え続けているからです。マルワリード用水路が完成してから、一〇年近くが経ちますが、蛇籠、沈砂池、排水路など取水口以外の設備を整備しているために、現在も安定的に灌漑されています。

しかし他の団体は取水口の建設ばかりを考え、取水口以外の設備に手を回すことは



2017年5月ソルフロッド郡で着工した新規給水プロジェクトの現場見回り中のジア医師



マルワリードⅡ用水路ルートでの測量調査中のファヒーム技師

ありませんでした。だから失敗しているのだと思います。

外国の団体は現地に来ては時間を無駄にしている人が沢山いますし、現場に行かない人々も沢山います。しかし中村先生は自分たちアフガン人が怖くて行けない所にも行くのです。中村先生が現地の橋を歩いていけば村の小さい子供たちが自然と集まってきて「ドクター中村だ！」と言って駆け寄ってくるのです。それは先生がお金をばらまいているからでももちろんありません。PMSの事業の実績でその名が地域中に

知られ、住民の生活を実際に助けているからこそ中村先生は尊敬されているのです。そして、村人とのコミュニケーションを十分にとっているからこそ、村人はサポートしてくれているのです。

カマⅡのプロジェクトの際にも我々は現地の人々に約束をし、現地の人々にも約束をしてもらいました。「あなたたちは水が要るか？あなたたちに水が要るなら、我々には安全が必要なのだ、治安が必要なのだ」。工事現場には中村先生やスタッフが行きます。水は我々が提供する、だから我々に安全を提供してください、と約束をしました。

二〇〇〇年の井戸掘りから 灌漑事業まで

PMS エンジニア
モハマド ファヒーム

私はエンジニア、ファヒームです。二〇〇〇年の井戸掘削の時からPMSで仕事を始めました。私たちは一、六〇〇本の井戸を掘りあげました。二〇一〇年にJICAの共同事業が始まり、当初私は灌漑事業要員ではありませんでしたが、中村医師が、

二〇一〇年から二〇一四年のカシコートの建設の際、現場から約二〇km下流にあるカマ橋を渡ってカシコートに入るのですが、そこには武装勢力がいて危険でしたので、現場近くの壊れている橋を用心しながら渡って行きました。今ではこのプロジェクトの労働者の中にそのグループの親戚がいる程です。これはPMSとこのグループとの間にコネクションがあるからではありません。仕事があるからこそで、危険なグループと関係を持つ人々ですら職を求めてPMSに来るのです。地域住民からも尊敬される中村先生を我々も尊敬するのです。神のご加護が中村先生にありますように。

カマⅡ灌漑事業を始められた時に、「鈴木学さん（当時現地ワーカー）と一緒に勉強をして、分からないことがあれば何でも聞きなさい」と言われ、灌漑事業に加わることとなりました。中村先生からは何度も何度も、「とにかく勉強をして、分からないことは何でも、いつでも自分にも聞きなさい」と言われ、一生懸命勉強をしました。ドクター・サブ中村も作業員と一緒に工事現場に行き仕事を行い、重機の仕事を自分でもされています。これまで日本からたくさんさんの青年が手伝いに来てくれ、一緒に一生懸命働いてくれて大変良い仕事ができています。



マルワロードⅡ建設現場責任者補佐と打合せ中のディダール技師（左）

灌漑用水はライフライン

PMS エンジニア
ディダール ムシユタク

私からもドクター・サーブ中村と皆様にご感謝の気持ちを申し上げます。アフガニスタンの貧しい人々を助けて下さっていることに対してお礼を申し上げます。皆様のおかげでアフガニスタンの貧しい人々が

より良い暮らしをできるようにになりました。私たちはPMSの活動を通じて現地の人々に灌漑用水を提供していますが、現地では灌漑用水はライフライン、人々の命を支えるものです。その意味で、この現地の人々にとってPMSの活動は非常に重要なものなのです。私からペシャワール会の皆様へ心から感謝の意をお伝え致します。

▼寄付をしてくださる皆さまへ

*当会は法人格を持たない「任意団体」です。お送り下さったご寄付については税金控除の対象となりません。予めご了承頂きますよう、お願い致します。

▼未使用の切手、書き損じハガキ（官製ハガキ・年賀ハガキ）をお送り下さい

*引き出しの中などに眠っているものをお送りいただければ幸いです。会報発送等に使用していただき大変助かっております。なお、外国の切手は取り扱っておりません。

▼現地活動を紹介するパンフレットをお送ります

*ペシャワール会の活動をご紹介されるときにお使いいただけるものです（払込用紙がついています）。ご希望の方は遠慮なく事務局にお申し越し下さい。パンフレットはA3変形を四折りしたもので、長形の定形封筒に入るカラー版です。なお、パンフレット、会報等は受け取る意思のある方への配布を原則としております（ポスティング等は行わないこととしております）。

サファル・バハエル！（良い旅を）

甲斐大策 24

山の村のポプウ

見響かす山並を青い霧が埋めていく。三十年前の戦乱で崩れた族長宅三階の床が半欠、空中に浮いている。村の泥屋には珍しい飾り窓や装飾のある角柱が残っている。アフガニスタン東部を南北に千余キロ、山嶺が縁どる地勢は有史前から東西を隔て、また接壊もし、そこに多くの小部族が生きてきた。歴史に搾り出され、生きる場を平地には獲得出来なかった人々である。哀しき誇り、強く辛く生きるこの人々を、征服も懐柔もかなわなかった英国人達は、悍猛な蛮人の物語を部族世界に固定させてきた。

山の部族達は、王権や政争に関らない。混乱が齎らす街道や物流のお零れを拾い高い、国家はそれを密輸といい、経済の一部としてもきた。古来変らない現実である。そんな部族の生きるこの山村が百年前、歴史の一部となった。第三次アフガン戦争で敗走する英国軍を追撃する、パシュトゥン部族連合軍を率いる、ナーディール・ハーン将軍が、この村の族長宅三階を指揮所とした。三代前の族長はそこを「將軍の間」と呼び、洋風に手入れをしたのだった。

ポプウは今五十五、六歳、身寄りはない。土砂崩れから独り救われた嬰児を先代の族長が養子とし、ウスブネと命名したものの、幼名の儘育てる。ポプウは常に寡黙、二人の実子と異なり下男同然に生きて不満はなかった。養父はポプウに家と土地の管理を委ねて逝った。養兄達はペシャワールで村人達さえも餌食に生きる金融業者となり、山の村は省みない。

間もなく日没、ラマザン半ばの満月が昇る筈である。端坐するポプウの前には、塩入りの緑茶とナンの塊、そして幼な馴染みから届いた蜂蜜とヨーグルトの小皿が並ぶ。

- (1) 対英独立戦争。
- (2) 後に短期ながら王位についた。
- (3) 成長を確信する迄の幼名、新生児死亡の多きから。
- (4) ラマダンにはアラビア音。

アフガニスタンにおける PMS手法の 広域展開に向けて

— JICA支援の視点から

国際協力機構アフガニスタン事務所

森口隼

はじめに

戦国時代、豊臣秀吉の知恵袋と言われた黒田官兵衛は、「常に己の進路を求めて止まざるは水なり」「障壁に遭いてその勢力を百倍するは水なり」「洋として大海を充し、発しては蒸気となり雪に変し霰と化し凝りては玲瓏たる鏡となり而もその性を失わざるは水なり」などから成る格言・水五訓を後世に残したとも言われている。アフガニスタンにおけるPMS—国際協力機構（以降JICA）共同事業にも当てはまる先人の教えではないだろうか。

本稿では、農業国アフガニスタンにおける灌漑事業の成功事例の一つである同事業が掲げるPMS手法の広域展開という目標に向け、PMS関係者の協力のもと、主にJICAが主導する取り組みを紹介し、今後に向けた考察としたい。

JICAによる水文・気象情報整備の 取組みとPMS基礎情報収集調査

PMS事業は、冒頭で紹介した水五訓に述べられている水という自然の摂理に長期間にわたり真摯に向き合いながら事業を継続実施していることが成功の大きな要因と言える。アフガニスタンは、乾燥・半乾燥地帯に位置し、雪解けによる水資源が農地を潤すという水循環サイクルを持つ。このような自然環境下で実施されているPMS事業は、水不足に対応するための灌漑用水の確保、治水を目的としたクナル河の洪水対策効果、圃場での排水路網整備を通じた適切な水資源の管理・保全等の統合的な水資源管理・利水・治水の特徴を有している。

水資源の適切な開発・利用・管理という観点において、PMS手法の広域展開の基礎となる事業の一つは、JICAがアフガニスタン国内で実施中の技術協力事業「水文・気象情報管理能力強化プロジェクト（以降、HYMEP）」である。アフガニスタン全土にはカブル河川流域、パンジ・アム河川流域、北部河川流域、ハリロッド・ムルガブ河川流域、ヘルマンド河川流域の五流域があり、流域毎に水位・降水量・最低最高気温・湿度などの農業や水資源計画に不可欠な水文・気象情報の収集・整備を進めている。特に、一九七九年から現在に



JICA本部での中村医師、ジア医師による講演会（2017年4月19日）

至る情報を米国大洋気象庁（NOAA）が公開する全球大気監視プログラムに基づいて再解析したデータと、全土の水文・気象観測所で収集している地上観測データとのキャリブレーション（校正）を通して、三〇年以上の長期間にわたり精度の高い情報の整備を進めている。二〇〇〇年代以降、地上観測データの再整備を目的として、世界銀行は、アフガニスタンの水・エネルギー省を対象に「灌漑修復・開発プロジェクト」を実施し、主に灌漑施設等のハード整備を進めると共に、全土に計二三〇箇所の水文・気象観測所を設置している。JICAは同プロジェクトに対して、水文・気象情報整備等のソフト面での能力開発を目的としたHYMEP等の事業を進めている。同支援の成果を活用する形で、マルワリードII堰事業の実施期間である二〇一六年



山田堰にて、堰の工法の説明を受けるPMS現地スタッフ。左からジア副院長、ディダール、ファヒーム技師（2017年4月21日）

一〇月から二〇一八年九月にかけて、PMS手法を「工学的水利施設計画・設計」ならびに「社会調査」の観点から調査を実施し、今後の「広域展開」の基礎材料とすることを目指している。同調査を本格的に始動するにあたり、二〇一七年四月に中村医師、PMSジア副院長、ディダール技師、ファヒーム技師を日本に招聘し、同調査を担当するJICA専門家をまじえた初会合を開催した。同調査は二〇一八年夏までの最終報告書の完成を計画している。

PMS手法の広域展開に向けた取り組み

PMS手法の広域展開に向けては、技術的な調査報告書を基礎資料として作成することに加えて、アフガニスタン政府関係者



完工したミラーン堰（JICA共同事業、2016年9月28日）

やJICA以外の開発援助機関による正しい事業理解も不可欠となる。このため、二〇一六年六月には、水エネルギー省のファヒーム副大臣、上述の世界銀行の関係者等を対象に、福岡県朝倉市・山田堰でのスタディーツアーを開催した。さらに、JICAより国連食糧農業機関（FAO）に業務委託をしている事業において、ナンガラハル州ミラーンにPMS手法普及に向けた研修を実施する訓練所を建設している。この他、アフガニスタン政府に対して、JICAが実施している日本の大学への留

学生事業であるPEACE事業に参加するアフガニスタン政府職員の中から、PMS手法を修士論文または博士論文の研究テーマに設定したいと申し出るような環境を醸成することも将来的な取り組み課題として有用ではないかと思われる。

アフガニスタン農村地域の安定化に向けて

上述の通り、JICAは広い分野での支援を通して、PMS手法の広域展開を下支えする取り組みを推進している。一方、この度の工学的水利施設計画・設計ならびに社会調査で明らかになる工学的・社会的な因子にまつわる専門的なデータに加えて、PMS事業関係者が長きにわたり築き上げてきた地域コミュニティとの信頼関係により創出された支援者と支援の受け手が一体的に事業を成功に導いたという「ストーリー」をいかに実現、普及させることができるのか、それこそが今後のアフガニスタン農村地域の安定化の鍵の一つとなるのではないだろうか。

〔付記〕最後に、PMS関係者各位の皆様による多大なるご支援とご理解に深く感謝申し上げます。また、ここに示された意見は私個人のものであり、所属する組織を代表するものではありません。

（注）水五訓の格言の由来については諸説あり、正確な由来は不明とも言われている。

●事務局長便り

＊今年の春（四月一五日～二二日）、PMSのジア副院長（医師）とエンジニアのディジタル技師、ファヒーム技師が来日された。東京でのミーティングの後、福岡に移動し、朝倉市の山田堰見学の熱気も覚めやらぬうちに、ペシャワール会事務局との懇親会も行われました。短くハードなスケジュールでしたが、ジア医師とは久々の再会を喜びつつ、直接お会いすることでPMSとペシャワール会のプロジェクトに血が通うのを感じました。

ジア医師が一番気にされていたことは、「PMSの今後」のことでした。私たちが活動を始めて三三年が経過しましたが、世代交代の時期が迫っていると云えます。PMSが自立し現地に土着するためにもその支援体制の確立が急がれます。JICAとの共同事業やFAOとの訓練所建設もその布石となります。その事業を日本側で支えるためにも、PMS支援室（PMS・JAPAN）の拡充が急務です。現在、支援室は、この春からの新人二人を含めて五名、二〇歳代の青年達が中心になります。支援者の皆様方のご理解をお願い致します。

＊中村医師の新刊「アフガン・緑の大地計画 伝統に学ぶ灌漑工法と甦る農業」（石風社）が出版されました。本書を底本として、現在英語版と現地語版のテキストも製作中です。DVDの技術編（英語版）現地語版製作中」と共に、現地ワーカー教育のための教材として使用されます。本書は、多くの写真を使い（全てカラー）灌漑工法について解説されていますが、「技術編」だけでなく「総論」、「山田堰」、「参考文献（永田謙二氏）」を含めて、一般読者が読んでも充分理解できるだけでなく、PMS方式が、これまでの国際的な援助システムに比べて、いか

に現地農村にとって有益であるかが、具体的に示されています。事務局でも扱っておりますので、DVD共々ご購入頂ければ幸いです。

●PMS支援室より

人間は、肌の色は違えど皆同じ人間で、貧困に苦しむ現地住民に手を差し伸べたいという気持ちで中村医師と共に働くことを決意させたジア医師は語り、今回の訪日ではこれまでのペシャワール会の現地支援に対する感謝の意と、今後の支援の継続への願いを語りました。「PMS二〇年継続体制」の実現の為にPMS・Japan（PMS支援室）の青年職員の継続的な技能向上が不可欠な条件となります。現在、PMSの実務、そして精神を受け継ぐところこそが支援室の課題、そしてアフガニスタン国民への支援の継続を可能にする体制の実現に寄与するものであると信じ、これまでペシャワール会の三三年間の歴史を築き上げてきた数々の熟練の事務局員の方々より日夜業務指導を受け、技能向上とPMSとペシャワール会の精神の引き継ぎに努めています。

②村から

＊ソ連のアフガニスタン侵攻時、ペシャワールの街に砲声が響く中、故郷に帰れないハンセン病の患者さん達にクリスマスケーキをふるまうと一緒に食べる日本人医師「中村哲」という人を新聞記事で知って、はや三〇年近い歳月が流れました。その後訪ねた事務局で、折々に自分のできることをやってきたのですが、現地渡航の機会にも恵まれました。足を踏み入れたアフガニスタンの沙漠の端は、今緑野に変わっているそうです。これからも続くであろう中村先生の闘いに、できることをただ淡々とやっていくだけです。（T・N）

会 則

- ①本会の名称をペシャワール会とする。
- ②本会は、中村哲医師のパキスタン北西辺境州ならびにアフガニスタンでの医療活動などを支援し、必要な情宣・募金活動とともにワーカーの派遣を行うことを目的とする。
- ③本会は、思想・信条にとらわれず、「支え合い」の精神で一致して会を運営する。
- ④会員は年額三、〇〇〇円、学生会員一、〇〇〇円、維持会員一〇、〇〇〇円の年会費を納入する。
- ⑤会員はそれぞれ可能な範囲で、自ら創意工夫して自由なやり方で支援活動を行う。
- ⑥本会は会報を発行し、会報を通じて活動を報告する。
- ⑦本会は若干名の理事、監事を選任し、会の運営を行う。
- ⑧毎年一回総会を開き、事業および会計について報告する。
- ⑨本会の事務局をFARAHOUSE（〒八一〇〇〇二三 福岡市中央区警固二一―一七 ハイツみかげ八〇三号 Ⅱ）〇九二―七三二―二三七二）内におく。

総会、現地報告会は、原則として毎年六月第一土曜日に開催いたします。